# 「利用されてこそ魚礁」

## 水産土木センター・築地セミナー

## ＩＣＴ、ＡＩなども活用へ

水産土木建設技術センター（宇賀神義宣理事長）は15日、東京・築地で第5回「築地セミナー」を開き、同センターの桑本淳二長崎支所漁場開発部部長が「魚礁調査関連の特化技術」をテーマに講演した。

関係者にあいさつする宇賀神理事長。その㊨は桑本部長

桑本部長は魚礁の歴史を紹介したあと、現在でも多くの地域では「（魚礁の設置場所などは）精度の低い紙媒体による資料しか残っていない」と指摘。最新技術を用いた情報のデータベース化に言及しつつ、「魚礁情報の管理に加え、操業位置や水揚げ情報のデータをマッチさせ、効果の客観的評価が必要」と訴えた。

今後の展望では魚礁設置台帳の整備に加え、情報通信技術（ＩＣＴ）、モノのインターネット（ＩＯＴ）、人工知能（ＡＩ）などの活用に期待を寄せた。これらにより「効果が最大限発揮できる設置場所、構造、配置といった選択の根拠が高まる」という。特にＡＩについては「漁港漁場分野での利用可能性は高い」と述べ、他産業に乗り遅れず早期に取り組んでいくことが必要と指摘した。

多角的な展開が見込まれる魚礁（漁場整備）だが、本質は「原点回帰。利用されてこそ価値がある」と強調。漁業者の便益のため設置された魚礁でも、都市近郊では遊漁者の利用が大半になっているケースもある。今後は「耐用年数を経過したり、網かぶりをして機能が低下した過去の優良魚礁の機能回復が大事なのではないか」と展望を話した。